

# 抜き取られた敦煌文書

——何彦昇、鬲威のことなど・太公家教攷・補(三)——

黒田 彰

## 一 敦煌文書の伝来と受容

## 二 葉恭綽による二つの序

## 三 『敦煌図像徵考録』所収の序

## 四 『敦煌図像徵考録』の刊行事情

近時、財団法人武田科学振興財団杏雨書屋の所有に掛る、故羽田亨氏蒐集の敦煌文書、敦煌秘笈が公開され、その中に幼学書の太公家教が二本、含まれていることが判明した。その太公家教についてはかつて、拙稿「杏雨書屋本太公家教について——太公家教攷・補(二)——」(『杏雨』14、平成23年6月)において、述べたことがある。その際、敦煌秘笈の伝来、受容を考察する機会があつて、例えば李盛鐸が深く関与した文書である所から、その伝来に関しては、北京に運ばれた敦煌文書からの、言わば抜き取りが囁かれる事情について触れた。また、杏雨書屋本太公家教(羽664)は、何彦昇旧蔵の文書と考えられるが、その何彦昇に関しても、同様の事情が存している。

小稿は、それらの抜き取りを伝える新資料として、張虹の『敦煌図像徵考録』所収の葉恭綽による序文を紹介し、その内容や刊行事情等を述べようとするものである。併せて、敦煌文書の抜き取りについての基礎史料の一、二を掲げる。

「それで革命の時、ペキン図書館の敦煌経は……」

「はつきりはわからないが、何でもそのどさくさに紛れて、だいぶ目ぼしいものが行く方不明になったという噂が一時伝わったが、さっきの高官要人のどさくさ紛れの悪徳沙汰なんぞもこの前後の話かもしれない。」

(松岡 譲『敦煌物語』十四 エピソード)

## 一

学問は、奥が深いので、その限界を見定めることが、とても難しい。特にテーマが大きい場合、全ての局面をカバーするには、途轍もない労力を必要とする。私達は日頃、様々なテーマについて研究しているが、時として小さな問題を先送りすることにより、行論そのものを優先させることがある。鹿を追って山を見失わないためである。それを手抜きとは思わないが、問題の残されていることに変わりはない。昨年度の拙稿「杏雨書屋本太公家教について——太公家教攷・補二二」は、杏雨書屋本太公家教〔羽田〕の本文系統及び、伝来を考察したもののだが、特に李盛鐸旧藏敦煌文書の日本への将来をめぐる、その伝来の問題は、A・スタイン、P・ペリオに始まる、中国からの敦煌文書の持ち出しを中心として展開した、世界史的規模における現在の敦煌文書の保管状態に関する、極めて大きなテーマと言えた。そのような伝来の問題を扱う拙稿が、基礎的資

料の一つとして踏まえたものに、饒宗頤氏「京都藤井氏有鄰館藏敦煌殘卷紀略」という論攷がある。饒宗頤氏の当論攷は、タイトルにある、藤井齊成会有鄰館に所藏される敦煌文書また、武田科学振興財団杏雨書屋に所藏される敦煌文書〔羽田亨氏蒐集に掛る所謂、敦煌秘笈〕の日本伝来を考える上で、非重に重要な必須文献の一つと評し得ようが、拙稿の執筆時、饒氏の論文について、どうしても確認出来ない事柄が二点、その後の課題として残された。

饒氏の論攷において当時、確認出来なかった事柄の一つは、例えば『金匱論古綜合彙』一所収のその九七頁、十四行目に、

唐蘭亦曾藏有太公家教殘卷（見北京大学五十周年紀念敦煌考古工作展覽概要）

とされることの、出典の確認その他である。また、二つ目は、饒氏論攷の同頁、十九行—二十二行目に、

友人張虹聞諸故京老輩云、何彥昇于宣統二（一九一〇）年官甘肅藩司、代理巡撫、当其任内、適学部咨陝甘總督調取敦煌經卷、着何氏收購到京。抵京後何氏先交其子鬯威（名震彝）。時官中冊數、報有卷數而無名。稱乃行款字數、故一卷得分為二三、以符報清冊之卷數。何鬯威為李木齋盛鐸之婿、故青英多歸李氏及何氏。李之親家劉廷琛与其親友亦分惠不貽（參看葉遐庵序）

とされることの（へ）は、割注）、出典の問題である。例えはこのことは、末尾に、

#### 参看葉遐庵序

と注記があつて、その「葉遐庵序」とはまた、

葉遐庵言……〈見所作張虹寄伝庵敦煌図録序稿〉（15

—16行目）

とか、

葉遐庵云……〈見寄伝庵敦煌図録序〉（29—31行目）

などと言われる如く、葉恭綽（一八八一—一九六八。遐庵は、その号）の作つた、「張谷雛所藏敦煌石室図籍録序」

（『矩園余墨』序跋補遺所収）のことを指し（張虹は、字が谷雛で、寄伝庵と号した）、一見、何の問題もないように見える。さて、葉恭綽のその序を見ると、

蓋敦煌石室藏物之散出、可分為數類。一為史坦因所取、二為伯希和所取……四則清宣統二年由学部調取後付存今北平圖書館之九千余卷、其到京以後之中飽、誠如谷雛所聞、其時官中冊報有卷數而無名稱及行款字數、故一卷得分為二三、以符原數、其精英皆歸李氏、次及劉幼雲廷琛へ李之親家。又次及李之戚友、其得分惠二三卷至十數卷者亦不尠……至李・劉・何所得、何早卒、除其生前贈友者外、余聞亦歸李氏。世僉知李・劉二氏多仏経以外之典籍、偶露鱗爪、固難窺其秘也。近年

李・劉皆去世、所藏始分別散出、余曾介南京圖書館購入二百余卷。聞劉氏有佳品約百卷歸於張君厚、張固劉戚也。李所藏由家屬析分、各售不復能聚

とあつて、確かに張虹の聞いた話（「誠如谷雛所聞」）が記されてはいるが、そこには、饒氏の言う、肝心の何彦昇、鬯威父子のことが出て来ず（僅かに、「……何所得、何早卒……」と記されるのみである）、また、張虹がその話を誰から聞いたのか、その話し手のことなども出て来ない（饒氏論攷には、「友人張虹聞諸故京老輩云」とある）。即ち、饒氏が何故、

#### 参看葉遐庵序

と言われたのか、それを出典の注記と見ることに、聊か疑問が残るのである。

本年（二〇一二年）三月、北京大学国際漢学家研修基地の招きにより一月間、北京大学に滞在した。その折、かねてからの上記の疑問に関し、改めて考えてみる機会を得た。例えば饒氏の言う、唐蘭氏の所藏に掛る太公家教については、北京大学図書館において、『北京大学五十周年紀念敦煌攷古工作展覽概要』を閲覧することが協つたのである（表紙の題左に、「胡適題」と記す。以下、『展覽概要』と略称する）。それは、『展覽概要』『敦煌『経卷』『照片』及『図書』目録』の二〇頁一、二行目に、

太公家教殘卷〔唐蘭先生藏〕

唐末五代寫本

とされるものである（図一）。残念ながら、この太公家教がどのようなものであるのか、殘卷であること以外、分らない。幾本かの羅振玉旧藏本共々、その行方に関しては、なお後考に俟ちたい。所藏者の唐蘭（一九〇一—一九七九）氏は、著名な歴史学者で、一九四六年以来、北京大学教授の任にあつた人物である。なお『展覽概要』の刊年は、不明だが、京師大学堂の設立された一八九八年（光緒二十

四年）から起算すれば、その五十周年は、一九四八年となり、その年は、中華人民共和国の成立する前年に当たる、中国の大変な時期である（なお京師大学堂を改名し、北京大学として発足したのは、一九一二（民国二）年のことである）。

饒氏の論攷における、もう一つの疑問は、饒氏の引く、葉恭綽の序文「張谷雛所藏敦煌石室図籍録序」（『矩園余墨』序跋補遺所収）原文を見ても、例えば何彦昇、鬲威父子のことなどが出て来ない、という問題であつた。この問題はまた、饒氏の、「友人張虹聞諸故京老輩」と記される文言から、例えば何彦昇、鬲威父子が、北京に到着した敦煌文書から、重要な文書を抜き取つたという話は、饒氏の友人である張虹より、饒氏が聞かされた話なのであつて、その間の出来事はまた、葉恭綽の序文にも見えて

二〇

敦煌經卷、照片及圖書目錄

太公家教殘卷〔唐蘭先生藏〕

唐末五代寫本。

歡喜國王緣〔啓功先生藏〕

此卷原爲上虞羅氏所藏・已印入敦煌掇瑣餘曲三種內・陳寅恪先生作跋・題有「有相夫人因緣曲」。此爲前半・無題・後半在巴黎・（*Pelliss 3775*）有後題・作歡喜國王緣・因改題如此。背書廿二問・亦佚經也。

僱孫奴子券〔方雨樓先生藏〕

天復七年（九〇七）正月十八日立。

敦煌石室遺書 一冊

按伯希和於宣統元年秋・携其所得敦煌遺書數十卷來北京・董康獲消息最先・中秋節日羅振玉始晤伯氏於蘇州胡同。於是羅振玉王仁俊蔣斧諸氏・始出資得其照片。此冊爲應

一 圖

いる、という風に解釈して、済ませられないこともない。しかし、気になる点が、一点存する。即ち、このことは、例えば有鄰館文書が何彦昇旧藏文書であり、加えて、杏雨書屋蔵の所謂敦煌秘笈の内にも、少なからぬ何彦昇旧藏文書が含まれている等、スタイル、ペリオに始まる、世界的規模の敦煌文書流伝史の一翼を形成する、



日本におけるその伝来と受容を証拠付ける、基本資料に関わる問題でもあって、その間の事情は、出来るだけ正確な把握を期す必要があるだろう。

## 二

饒宗頤氏がかつて張虹から聞いた話で、また、葉恭綽の序文にもその話が見えるという、件の問題は、そもその話の根元が、「諸故京老輩」から、張虹の間かされた話にあることを始めとして、引用関係が幾重にも重なっている点、その成り立ちが聊か複雑である。ここで、その複雑な引用の関係を少し整理、確認してみよう。

まず分りにくいのは、例えば饒氏が、

見所作張虹寄伝庵敦煌図録序稿

とか、

見寄伝庵敦煌図録序

などと言われ、また、その序文の筆者葉恭綽が、序文に題して、

張谷雛所藏敦煌石室図籍録序

とする、張虹の「敦煌図録」（饒氏）、「敦煌石室図籍録」（葉恭綽）とは何か。それは、張虹の所藏する敦煌文物の著作であり、また、他ならぬ葉恭綽の序文を頂く書物であったことは、葉恭綽の序文の始めに、

「張虹」又於燕京得敦煌出土物如茲錄所載、余已為之題跋矣。嗣谷雛広徴同人考訂識述、彙為一編、復問序於余

と記す通りである。では、葉恭綽がその序文を書いた、「敦煌図録」ないし、「敦煌石室図籍録」というのは、一体どのような書物なのか。旧稿（「杏雨書屋本太公家教についで―太公家教攷・補（二）―」執筆時、それを搜したのでが、張虹の「敦煌図録」ないし、「敦煌石室図籍録」なる書物は、何処にも見当たらず、恰もそのような書物は、世の中に存在しないかのようであった。書名が違うのではないかと疑われ、不審のみが積み重なって、その調査を半ば諦めかけていた折、この問題に一条の光が差したのは、榮新江氏による名論文、「李盛鐸藏卷的真与偽」（『敦煌學輯刊』97・2）を読んでいて、その葉恭綽の序文の引用（3頁）に対する、注⑩（6頁）に、

張虹《敦煌圖像徵考録》、香港弘道芸術院、一九六三年、5頁

とされているのを、目にした時のことである。やはり葉恭綽が序文を寄せた、張虹の書物は存在していたのであり、但し、その書名は、「敦煌図録」や「敦煌石室図籍録」ではなかったらしい。そこで、張虹の『敦煌圖像徵考録』なる書物を、手を尽くして捜してみたのだが、残念なことに

これもまた、何処にも見当たらず、どうやら日本においては、見ることの出来ない書物のようである。そういった事情で旧稿の執筆時、『敦煌図像徵考録』の確認作業を一旦中断することとし、その閲覧は次の訪中の折の課題としたのであった。

この三月の北京滞在は、本件を含め、従来からの諸課題を考える上でも、得難い機会を提供してくれた。早速、

『敦煌図像徵考録』の確認作業を再開することとし、まず向かったのは、北京大学図書館である。ところが、北京大学の蔵書中には、『敦煌図像徵考録』が見当たらず、少し慌てた。次いで、本書を捜したのは、国家図書館（旧北京図書館）である。しかし、本書は、国家図書館にも所蔵されていらないことを知るに及んで、愕然とすると共に、途方に暮れざるを得なかった。最後に一つ、私が思い付いたのは、榮新江氏に教えを乞うことである。実は、榮氏は北京大学歴史学系教授であり、ほんの何日前、態々会食に来て下さって、知遇を得たばかりであったが、私の唐突な質問に対し、榮氏は丁寧に応じて下さった。そして、張虹の『敦煌図像徵考録』が中々見付からないことについて、榮氏が、それは正式な公刊物ではないと言われたことで、それが何故、北京大学等に見当たらないのか、漸く納得出来た次第である。加えて、榮氏は、ずっと以前、香港中文大

学で本書を見られたとのことで、その全文のコピーを、私に御貸与下さったのである。ここに、旧稿以来の私の疑問の一つが、やっと解決した。学縁というものは、つくづく有難いものであると思う。調べてみると成程、榮氏の仰る如く、香港にはなお幾つか、本書が現存していることが判明した。

さて、本書を繙くと、まず「六朝人彩繪十二尊像絹本」以下、三点三頁の図版を戴き、四頁目に「張谷雛老師小伝」（莫儉溥筆）を載せた後、序文が二つ置かれていて（5―7頁）、その内の「叙」とする、始めのそれが、問題の葉恭綽の序文となっている（5―6頁上段。下段―7頁下段前半が、張虹による「序二」、後半は、目次）。八頁から二十四頁までが、「敦煌図像徵考録」と内題する本文で（次に奥付を付す）、それら序文、本文共、張虹自筆稿本を一頁上下に影印した、特殊なものである（後掲表紙に、「張谷雛先生手写」とある）。本書は、大型本ながら、全二十四頁という短いもので、榮氏の御教示のように、カATALOGタイプの私家版と言うべきものだろう（具体的なことは、後述する）。

件の葉恭綽の序文は、本書の五―六頁上段に載るが、私が何より驚いたのは、本書所収のその序文を閲すると、『矩園余墨』序跋補遺所収のそれには見えない前述、何彦

昇の子、鬯威のことが見えることである。例えば葉恭綽は、その序において、敦煌文書流出のケースを五つに分け、その第四のケースとして、スタイン、ペリオ等による、文書持ち出しの後、清宣統二（一九一〇）年に、残った文書が北京に運び込まれた際、官吏による文書の抜き取りが行われたことを述べ（葉恭綽はそれを、「中飽」へ官吏が汚職で私腹を肥やすことと呼んでいる）、抜き取られた文書の帰趨先を上げて、

其精英皆歸李氏、次及劉幼雲延琛（李之親家）。又次及李之戚友、其得分惠二三卷至十數卷者亦不渺（『矩園余墨』序跋補遺所収）

と記しているが、例えば『敦煌圖像徵考録』所収のその箇所を見ると

其菁英皆歸李氏（盛鐸、別号木齋）、次及劉幼雲（延琛、李之親家）。又次及李婿何鬯威其親友、得分惠者不渺（『敦煌圖像徵考録』所収）

とあって、前者には見えない、李盛鐸の婿としての何鬯威のことが、後者の——線部に記されていることが分かる。加えて、後者は、前者と較べ、——線部に示したような、異同を存することもまた、知られるのである。即ち、『矩園余墨』序跋補遺所収の序文と、『敦煌圖像徵考録』所収のそれとは、無論同じ序文ではあるが、内容が異なってい

るのである。これは驚くべきことであって、有鄰館や杏雨書屋などに所蔵される、何彦昇旧蔵の敦煌文書の伝来を知る上で、基礎史料の一つに外ならない、件の葉恭綽の序文の言わば異本として、『敦煌圖像徵考録』所収のそれは、『矩園余墨』序跋補遺所収のそれとはまた、別途区別されるべき、大変大きな価値を持つ資料であるとしなければならぬ。そこで、この機会に、『敦煌圖像徵考録』所収のそれを、改めて紹介しておきたいと思う。まず図二（187頁及び、188頁上段）に掲げるのは、張虹自身の筆に成る、その原文である。

### 三

張虹の『敦煌圖像徵考録』に収める、葉恭綽のその序文を示せば、次の通りである。また、『矩園余墨』序跋補遺所収のそれとの異同を、末尾の校異表に示しておいた。<sup>⑦</sup>その示し方は、本文中の異同のある文字に、アラビア数字を付し、校異表のその数字下に、異同を掲げることとした。――の上が、『敦煌圖像徵考録』の本文、下が、『矩園余墨』序跋補遺に見える異同である（無は、――の文字がないこと、へは、割注、〔 〕は、私補を表わし、……は、省略を示している）。

叙

張君谷離安雅士，耽研藝術古物，前者曾與李鳳坡、編陽羨、砂壺、鬲考，為一佳著。余曾序之，繼廣搜書畫，又于燕京得敦煌出土物，如茲錄所載，余已為之題跋矣。嗣谷離廣徵同人考訂識述，彙為一編，復問序于余。余曰：敦煌鬲籍數萬子，所藏滄海一滴耳。然月印千江，何處非月？且數十年來，敦煌鬲籍赫奕於世，而深悉其蘊者尚希。余以積年留意，所知較豐，今老且死，來此表告世人，責亦應爾。故不辭贅筆，焉敦煌石室藏物之散出，可分為數類：一為史坦因所取，二為伯希和所取，三者世已周知。三則當史坦因未至之前，已有少許散出，蓋亦汪道士輩之所為。緣村人宣傳經卷，可以却邪治病，故恒出賣。向王道士索取地方官亦有用為餽贈者。前後當不下數百卷。厥後張廣建許承堯、蒯壽樞等所得，殆皆此類。蓋出在先，而集藏者在後也。張許蒯皆民國初年富貴翫四則清宣統二年由學部調取後文存，今平圖書館之九千餘卷，其到京以後之中飽誠如谷離所聞。其時官中冊報有卷數而無名稱，及行款字數，故一卷得分為二三，以符冊數。卷數其菁英皆歸李氏。威鐸別號木齋次及劉幼雲。徒探李之親家又次及李增何甕威，其親友得分惠者不數，五則史坦因、伯希和以外德意志、日本、美利堅各圖書館亦曾得大批，其時間不詳，殆皆在運交學部以前，或隨後

別于當地搜購。綜上所述，由敦煌整批流出之鬲籍，不外此數。厥後張廣建所得約二百卷，大半歸西充白堅。字鑒嗣聞又已散出，許承堯所得則分次售出。余曾與友人合購七卷，餘皆零售，莫可蹤跡矣。蒯壽樞所得殊少，或尚在其家。其散在國外者，聞英美德法今皆無恙。獨日本藏之旅順博物館，恐已燬失矣。至李劉何三人所得，何早卒，除其生前贈友人者外，餘聞亦歸李氏。世愈知李劉二氏多佛經以外之典籍，偶露鱗爪，難窺其秘也。近年劉李皆去世，所藏始分別散出。余曾介中央圖書館購入二百餘卷，聞劉氏佳品約百卷，歸于張子厚。張固劉戚也。李所藏由家屬析分各售，不復能聚。谷離所得殆即其類，抑李氏藏品亦有由市賈轉售，而加裝飾附會者。此亦不止李氏藏品為然。北方敦煌各品，均有仿製，以壁畫為多，造象次之。經卷最少，善法不易仿也。間有以真迹餘紙仿寫，其偽易售，然細辨終能別也。谷離所藏各品固無疑義，然李氏藏印顯係市賈所加，蓋木齋無自蓋藏印，以發其覆後之理。且刻工均劣，較之其印書印章，判若霄壤。此與書畫之強補印章，同為蛇足。明眼人所宜辨也。抑余時最感慨者，則敦煌藏品之發見，垂五十年，經國人之努力疾追，僅保全其部分。其散出國外者，已不復能返，而散在世間各地者，雖均遭

重視，但實際能加以整理與研究者，亦復不多。伯希和所得始終僅編成一部簡目，英德各國亦然。其根據各品物從事較深切之研究並有著作者，則仍推吾國。而日本次之。吾國例如羅振玉、王仁俊、曹元忠、主國維、蔣鳳藻、陳垣、劉復、主重民、鄭振鐸、張爰、陳寅恪、郭沫若、李翊灼、馬衡、向達、胡鳴盛、許國霖諸君，皆具有成就。其片段之考証闡發，則人數更夥。計非他國所能企及也。第綜合條貫，成為一有系統之專門研究者，仍不多見。則環境限之，吾人未可謂已盡其責也。吾嘗欲調查存世間之敦煌品物而編一總目，曾于十年前組設敦煌經典輯存會，以此為第一步之工作。然迄未能成，其已得之資料，因亂亦歸散佚，恒引為愧咎。今年力衰邁，祇可以待賢矣。往哲集存之物，吾人僅負保管整理之責，乃尚不能盡其職，違言改良進步，是以知吾國百端之不振，蓋有由矣。抑余更有感者：西北地方高燥，往時文物之存于山崑地穴，未遭毀壞者，必不知凡幾。敦煌者，而已近罕焉者，鄙善書吐魯番哈密一帶，經外人發掘取去之文物，騰騰耀耀，世界國人或竟不知之，或則視若無睹。吾人好自詡地大物博，然貨之棄于地，文物之藏于地，人民之居于地者，概聽其否盲晦塞，與損失而但以主人翁自居，則又何義也。故吾人之考古，宜有其遠大之思想，背景，否則玩物而又喪志矣。此又博雅好古之君子所宜知者。因閱斯編，推論及之，葉恭綽遐蒼識于香海。

## 二 圖

### 〔張谷雛所藏敦煌石室圖籍錄序〕

張君谷雛安雅士，耽研藝術古物，前者曾与李鳳坡、編陽羨砂壺圖考<sup>4</sup>，為一佳著，余曾序之。繼<sup>5</sup>廣搜書畫，又于燕京得敦煌出土物如茲錄所載，余已為之題跋矣。

嗣谷雛廣徵同人考訂識述，彙為一編，復問序于余。余曰：敦煌圖籍數萬，子所藏滄海一滴耳。然月印千江，何處非月。且數十年來敦煌圖籍赫奕於世，而深悉其蘊者尚希，余以積年留意，所知較豐，今老且死，乘此表告世人，責亦忝爾，故不辭贅筆焉。敦煌石室藏物之散出，可分為數類，一為史坦因所取，二為伯希和所取，二者世已周知，三則當史坦因未至之前，已有少許散出，蓋亦王道士輩之所為，緣村人喧傳經卷可以却邪治病，故恒出資向王道士索取，地方官亦有用為餽贈者，前後當不下數百卷。厥後張建<sup>19</sup>、許承堯<sup>20</sup>、刪壽樞等所得，殆皆此類，蓋出土在先而集藏在後也。張·許·刪皆民國初年官甘肅。四則清宣統二年由学部調取後交存今北平圖書館之九千余卷，其到京以後之中飽，誠如谷雛所聞，其時官中冊報有卷數而無名稱及行款字數，故一卷得分為二三，以符冊數卷數，其菁英皆歸李氏<sup>24</sup>（盛鐸，別号木齋）、次及劉幼雲<sup>25</sup>（廷琛，李之親家）。又次及李婿何陋威其親友，得分惠者不尠。五則史坦因·伯希和以外德意志·日本·美利堅各圖書館，亦曾得大批，其時間不詳，殆皆在



運交学部以前或隨後別于当地搜購。<sup>28</sup>

綜上所述、由敦煌整批流出之図籍、不外此數。厥後張廌建所得約二百卷、大半歸西充白堅（字堅夫）、嗣聞又已散出、許承堯所得則分次售出、余曾与友人合購七八十卷、余皆零售、莫可蹤跡矣。<sup>34</sup> 劄劄所得殊少、或尚在其家。其散在国外者、聞英・美・德・法今皆無恙、独日本藏之旅順博物館、恐已燬失矣。<sup>35</sup>

至李・劉・何三人所得、何早卒、除其生前贈友人者外、余聞亦歸李氏。世僉知李・劉二氏多弘經以外之典籍、偈露鱗爪、難窺其秘也。近年劉・李皆去世、所藏始分別散出、余曾介中央図書館購入二百余卷。聞劉氏佳品約百卷歸于張子厚、張固劉戚也。李所藏由家屬析分、各售不復能聚、谷籙所得、殆即其類。抑李氏藏品亦有由市賈轉售而加裝飾附會者、此亦不止李氏藏品為然。北方敦煌各品、均有仿製、以壁画為多、造象次之、經卷最少、以書法不易仿也。間有以真跡余紙仿写、其偽易售、然細弁終能別也。谷籙所藏各品、固無疑義、然李氏藏印顯係市賈所加蓋、木斎無自蓋藏印以究其覆之理、且刻工均劣、較之其印書印章、判若霄壤、此与書画之強補印章、同為蛇足、明眼人所宜弁也。<sup>41</sup>

抑余所最感慨者、則敦煌藏品之發見垂五十年、經国人之努力疾追、僅保全其部分、其散出国外者已不復能返。而散在世間各地者、雖均遭重視、但實際能加以整理与研究者、

亦復不多。伯希和所得、始終僅編成一部簡目、英・德各国亦然。其根拠各品物從事較深切之研究並有著作者、則仍推吾国、而日本次之。吾国例如羅振玉・王仁俊・曹元忠・王国維・蔣鳳藻・陳垣・劉復・王重民・鄭振鐸・張爰・陳寅恪・郭沫若・李翊灼・馬衡・向達・胡鳴盛・許国霖諸君、皆具有成就、其片段之考証闡發、則人數更多、計非他国所能企及也。<sup>60</sup> 第綜合条貫成為一有系統之專門研究者、仍不多見、則環境限之、吾人未可謂已尽其責也。

吾嘗欲調查存世間之敦煌品物而編一總目、曾于廿年前組設敦煌經典輯存会、以此為第一步之工作、然迄未能成、其已得之資料、因乱亦歸散佚、恒引為愧咎。今年力衰邁、祇可以待後賢。<sup>61</sup> 夫往哲集存之物、吾人僅負保管整理之責、乃尚不能尽其職、違言改良進步、以是知吾国百端之不振、蓋有由矣。<sup>62</sup>

抑余更有感者、西北地方高燥、往時文物之存于山岩地穴未遭毀壞者、必不知凡幾、敦煌其一而已。近年焉耆・鄯善・吐魯番・哈密一帶、經外人發掘取去之文物、騰耀世界、国人或竟不知之或則視若無睹、吾人好自詡地大物博、然貨之棄于地、文物之藏于地、人民之居于地者、概聽其否盲晦塞与損失、而但以主人翁自居、則又何義也。故吾人之考古宜有其遠大之思想背景、否則玩物而又喪志矣。此又博雅好古之君子所宜知者、因閱斯編、推論及之。葉恭綽遐菴識于香海。<sup>63</sup>



〔校異表〕

1 叙―張谷雛所藏敦煌石室図籍録序  
 2 編―合編  
 3 陽羨―宜興  
 4 考―録  
 5 広搜―搜蔵  
 6 于―於  
 7 于―於  
 8 数―四  
 9 蘊―評  
 10 希―鮮  
 11 筆―述  
 12 敦―蓋敦  
 13 経卷―無  
 14 却邪治病―治病却邪  
 15 王―無  
 16 取―去供養  
 17 官―官吏  
 18 亦―亦恒  
 19 不下―有  
 20 皆―皆於  
 21 交―付

22 冊数卷数―原数  
 23 青―精  
 24 〈盛鐸別号木斎〉―無  
 25 廷琛―〔割注の小字とせず〕  
 26 李婿何邕威其親友―李之戚友  
 27 得分恵者―其得分恵二三卷至十数卷者亦  
 28 以―之  
 29 于―於  
 30 購―購者  
 31 〈字堅夫〉―無  
 32 嗣―以後  
 33 已―無  
 34 則―無  
 35 次―批  
 36 合購―共購無  
 37 矣―無  
 38 殊―不  
 39 蔵―所得蔵  
 40 博物館―図書館者  
 41 三人―無  
 42 人―無  
 43 難―固難

44 劉李——李劉  
 45 中央——南京  
 46 佳品——有佳品  
 47 于——於  
 48 子——君  
 49 加——加以  
 50 壁画為多——壁画最為流行  
 51 余——剩  
 52 写——写者  
 53 蓋——加  
 54 発——自発  
 55 印——蔵  
 56 人——無  
 57 垂——及  
 58 疾——起  
 59 復能——能復  
 60 簡目——簡明目録  
 61 国——国者  
 62 從事——加以  
 63 王仁俊……許国霖——王国維王仁俊陳垣劉復王重民鄭振鐸張爰陳寅恪馬衡郭沫若李翊灼曹元忠蔣鳳藻胡鳴盛許国霖向達

64 国——国人  
 65 第——然  
 66 存——存在  
 67 品物——石室物品  
 68 于廿——於二十  
 69 設——一  
 70 婦——都  
 71 賢——賢矣  
 72 乃——無  
 73 矣——也  
 74 于——於  
 75 必——無  
 76 知之——之知  
 77 則——無  
 78 于——於  
 79 于——於  
 80 于——於  
 81 盲晦塞——塞晦盲  
 82 景——境  
 83 閱——觀  
 84 葉恭綽遐菴識于香海——一九四七年冬

そこに、「又次及李婿何鬯威其親友、得分惠者不尠」と言われる、何鬯威こそは、例えば徐珂の『清稗類鈔』九鑑賞類「伯希和得敦煌石室古物」に、

迨学部貽書甘督、令購送來京、其菁華固已無多。時護甘督何彥昇有子在都、故先落其手、佳者復悉為所留。其婦翁李盛鐸且分得唐人所写『礼』注・『書經』等、尤可寶貴。凡与何子相契者、無不得之、有分至数百卷之多者、故廠肆出售不絶也

と記される人物であり、宣統二（一九一〇）年に北京へと運ばれた敦煌文物が民間に流出する際、言わば一基地を提供した、立役者に外ならない。何鬯威（一八八〇—一九一六）は、名を震彝といい、鬯威は字である。李盛鐸の女婿となった。父は、何彥昇（一八六〇—一九一〇。字、秋輦。江蘇省江陰県の人）で、何彥昇は、宣統元（一九〇九）年、甘肅布政使となり、翌宣統二年、新疆巡撫に移っている（布政使は、省の総督巡撫に直属する官名で、民政、財政を掌る。巡撫は、省の総督へ長官に次ぐ官名で、民政、軍政を掌る）。このことから、「時護甘督何彥昇有子在都、故先落其手、佳者復悉為所留」（『清稗類鈔』）と伝えられることになる。

ここで、葉恭綽が敦煌文書の流出ケースとして、第三のケース以下に言及する、主要な人物のことを述べておく。

左に記すのは、私的なメモである。張広建（一八六四—一八七七とも—一九三八）は、字を勲伯といい、安徽省合肥県の人で、民国三（一九一四）年に甘肅都督兼民政長、巡按使、甘肅將軍となる。延棟旧蔵の敦煌文書を襲蔵した。張広建の所持した敦煌本の一部は現在、三井文庫に伝えられている。許承堯（一八七四—一九四六）は、一名を菴と称し、字を際唐（菴公とも）といい、安徽省歙県の人である。張広建に従い、甘肅省府秘書長、甘涼道尹等を歴任した。句道興搜神記の完本を始めとする、その敦煌本は現在、中村不折旧蔵書の中に入っていることが知られている。蒯寿枢（一九四五）は、字を若木といい、安徽省合肥県の人であるが、待考。劉幼雲（一八六七—一九三二）は、名を廷琛といい、幼雲は字で、江西省德化県の人である。光緒三十四（一九〇八）年、京師大学堂總監督、学部副大臣に任じられ、北京に送られた敦煌文書の回収に当たる。なお白堅（一八八三—）は、字を堅夫（堅甫、山甫などとも）といい、四川省西充県の人である。古美術商として杏雨書屋蔵敦煌秘笈など、敦煌文書の日本流入に大きな役割を果たした、重要な人物である（「劉戚」とされる張厚へ張子厚、張君厚のことは、待考）。

それにしても、葉恭綽の序文を通読し改めて気付かされることは、例えば一九四七年以前という極めて早い時点に

において、敦煌文書に偽物（仿製）の出自していること、また、それに李盛鐸の偽印を捺したものがあり、その印は、李盛鐸自身によるものではあり得ないことを喝破し（「然李氏藏印顯係市賈所加蓋」と述べている）、指摘していることが上げられる。それらは全て、葉恭綽の当時の体験を通じての指摘に違いないが、その学識の高さは流石であり、今後評価し直されるべきものと言えよう。<sup>⑧</sup>

#### 四

件の序文の筆者、葉恭綽（一八九一—一九六八）は、字を蒼虎などといい、号は前述の通り遐庵、矩園とも署した、広東省番禺県の人である。清末から民国にかけて鉄道、郵政関係の要職を歴任した文人で、敦煌文物にも深い関心を有し、例えば敦煌文書の海外流出に心を痛めて、民国十（一九二一）年には、敦煌經典輯存会を組織している。葉恭綽が張虹の求めに応じ、その序文を書いたのは、『矩園余墨』序跋補遺所収のその末尾に、「一九四七年冬」とあることから（校異84）、一九四七年のことであることが知られるが、上掲の張虹による『敦煌圖像徵考録』が刊行されたのは、民国五十二（一九六三）年のことだから、その刊行は、序文が書かれてから、十六年を隔てた後のものである。すると、同じ序文における上記の異同は、長らく

張虹の書物が刊行されずにいたために、葉恭綽自身が手を入れて、己れの文集に編入したことによって、生じたものと思われる。さて、今日稀覯に属する『敦煌圖像徵考録』は、如何なる経緯で遅れて刊行されたのか、以下気の付いた事柄を、メモ風に記しておきたい。

まず『敦煌圖像徵考録』の著者の張虹とは、どのような人物なのであろうか。張虹（一八九四—一九六五）は前述の如く、字を谷雛といい、申斎また、寄伝庵と号し、広東省順德県の人である。張虹は、画家として知られ、日本画家橋本関雪の紹介により二年間、日本の美術専門学校で学んだこともある（莫俟溥「張谷雛老師小伝」）。張虹はまた、中国の古書画の蒐集に努め、その一環として自らの所蔵する、敦煌文物の解題及び、カタログ化を企てて、序文を葉恭綽に依頼したものである。その依頼は、一九四七年以前のことであろうが、実際にカタログが刊行されたのは、一九六三年のこととなっている。図三に掲げるのは、『敦煌圖像徵考録』の表紙（右）及び、刊記（奥付。左）である。つまり、その刊行は先に触れたように、序文を依頼してから、十六年以上を経過した後のことになる訳だが、どうして刊行がそこまで遅れたのか、その理由は、判然としないうおそらく何らかの事情があったのだろう。ただ一九六三年というのは、張虹七十歳の年に当たることから（張虹は一

張谷雛先生手寫

# 敦煌圖像徵考錄

門人莫儉溥敬題



## 敦煌圖像徵考錄

著者：張虹（谷雛）

出版人：香港弘道藝術院

香港九龍青山道304至306號四樓

香港路克道205至209號中學

電話：七六四七七五

經銷處：萬有圖書公司

香港觀利文新街十七號二樓

電話：四四四三一二

UNIVERSAL BOOK COMPANY

17, Gilman's Bazaar 1st Floor, Hong Kong

TEL. 44313

承印者：華聯印刷公司

香港灣仔菲林明道廿六號

電話：七六四五四三

中華民國五十二年（1963）十月十月初版

圖三

八九四年生まれ）、張虹の關係者（後述の莫儉溥など）が、その古稀を記念して、『敦煌圖像徵考錄』の本人自筆稿本（訂正等が入っているので、完成稿ではないらしい）を、そのままの形で出版したものと考えられる。また、本書の奥付（図三左）を見ると、その刊行日が、「十月十日」となっているが、その日は、武昌蜂起に始まる辛亥革命による、中華民国の建国を記念した国慶日、双十節に外ならず、張虹の古稀を祝うと共に、民国建国の祝いをも兼ねたものであろう。

さらに興味深いのは、同じく奥付に見える、本書の発行者（「出版人」）である。そこには本書の発行者として、二つの機関の名前が上げられている。即ち、一つは、「香港弘道芸術院」であり、もう一つは、「敦梅中学」である。それらは一体、どのような機関なのか。まず後者から見てゆく。

敦梅中学は、敦梅学校の中等部である。敦梅学校は民国八（一九一九）年、香港において莫敦梅（一八九六—一九四九）により創始された、書院形式の私立学校で、民国二十三（一九三四）年に敦梅学校を名乗る。莫敦梅が長く校長を務めたが、一九四九年に莫敦梅が没した後、長男の莫儉溥が校長職を継いだ。近時、廃校となる。その莫儉溥は本書表紙のタイトルを書いた人物で（図三右参照）、そこ

に、

## 門人莫儉溥敬題

と記されていることから、莫儉溥は張虹の弟子であったことが知られるのである（また、莫儉溥は、「張谷雛老師小伝」をも草しており、そこにも同様、「門人莫儉溥謹識」と署している）。そして、「張谷雛老師小伝」の末尾には、

張氏於戰前曾任……敦梅中學教員

とあるので、張虹は以前、敦梅中学において教鞭を執っていたことが分かる。おそらくそのような縁で、莫儉溥が本書の表題を書きまた、小伝を草して、本書を敦梅中学から刊行する運びとなったものに違いない。

次に、発行者の始めに名の上がる、「香港弘道芸術院」というのは、一体何であろうか。弘道芸術院は世界的な画家、丁衍庸（一九〇二—一九七八）の作った、謎の美術学校である。丁衍庸は、字を叔旦、号を肖虎などといい、伝統的な中国画の技法に西洋近代画法のフォーヴィスムを取り入れ、「東方のマティス」と称された、有名な画家である。弘道芸術院は、丁衍庸が香港において一九六三年に創立し、院長となった学校だが、先にそれを謎としたのは、それが僅か数箇月で廃止されているためである。同年十月には、芸術系を含む香港中文大学が発足しているので、或いは、そのことと関わる事情が、何かあるのかもしれない。

それにしても、本書の刊行されたのが一九六三年で、同じ年に弘道芸術院が作られ且つ、廃止されていることは、大変興味深い。或いは、晩年の張虹をそこに迎える計画でも存したものか（張虹は二年後に没している）。張虹も画家であったから当然、丁衍庸とは知音であっただろう。また、莫儉溥も著名な学校長として、丁衍庸とは親交があったであろうから、丁衍庸と莫儉溥の二人が、張虹の未刊の本書をその古稀記念として、国慶日に刊行しようと企てることは、十分に頷けることである。以上が、『敦煌図像徵考録』の刊行をめぐつて、私の知り得たことの覚書である。

饒宗頤氏が前引「京都藤井氏有鄰館藏敦煌殘卷紀略」を書かれたのは、一九五四年のことである。また、葉恭綽の序を含む、張虹の『敦煌図像徵考録』が刊行されたのは、一九六三年のことであった。従って、饒氏が見られたのは、上掲『敦煌図像徵考録』のそれではあり得ない。また、題名が異なる等、『矩園余墨』序跋補遺所収のそれでもないだろう。すると、饒氏は実際、友人の張虹からまず、その「諸故京老輩」による伝聞を聞き、そのことはまた、葉恭綽の序文にも書かれている事柄であるとして、張虹の手許にあった、未刊のそれを、見られたのではないかと思われる。饒氏がそれを、「寄伝庵敦煌図録序稿」と呼ばれた理由も、その未刊の故であろう。



最後に、この機会を借りて所謂、敦煌文書の抜き取りに関わる基礎史料を一、二、参考までに掲げておく。以下に示すのは、徐珂『伯希和得敦煌石室古物』（『清稗類鈔』九鑑賞類へ中華書局、一九八六年）に拠る）、羅振玉「姚秦写本僧肇維摩詰經殘刊校記」（『七經堪叢刊』所收、羅雪堂先生全集五編16に拠る）、羅繼祖氏「敦煌藏卷劫余小記」（『中華文史論叢』一九八〇・2へ80年5月）所収に拠る）の三点の関連部分である。

### 伯希和得敦煌石室古物（徐珂）

敦煌県東南三十里、三危山在焉。山下有三寺、上寺・中寺為道觀、下寺為僧舍。寺之附近為鳴沙山石洞、乃宋初西夏構兵時藏書之所、有石室數百、唐人謂之莫高窟、俗名千仏洞。各洞有壁画、上截為仏像、下截為造像人之像、並記造像人之姓名里居。中有一洞、藏書滿焉、以壁外有画飾、故無知其為藏書所者。光緒庚子（二十六へ一九〇〇）年、掃治石洞、鑿壁而書見、經史子集外、仏經尤多。又有唐時地契及唐曆書・唐拓碑。書有絹写本・紙写本・刻本・石刻本。其經帙、以竹糸或席草為之。古書合數卷為一帙、蓋即古帙之式也。又有布画仏像・紙画仏像及琥珀・珠・檀香等物。中有『陀羅尼經』、末記太平興國五（九八〇）年六月雕板字樣、此為最近之年月矣。其余各書、大抵皆唐・五代

本、又有六朝時絹本墨跡、殆西夏兵革時所藏也。

光緒戊申（三十四へ一九〇八）年、法国文学士伯希和遊迪化、謁將軍長庚、具述其事、並謁載瀾及安西州牧某、二人各贈以石室書一卷。伯知為唐写本、乃即馳赴敦煌、以二百金購得十余箱、皆唐・五代時物也。其物品如下（中略）

端忠愍公方時居京、与学部諸人用攝影法印之、並為排印。余悉運至法、其摄影以寄華者、有三四百片、大抵為唐高宗時物、中有『易』・『書』・『詩』諸本、及『穀梁』・『文選』李善注・『文選』五臣注、与今本頗有異同、又有已佚之『修文典御覽』及『羣金錄』、均殘卷。

壬寅（光緒二十八へ一九〇二）年、許伯阮遊敦煌、得唐人手書藏經五卷、出而語人曰、「石屋分内外、内屋因山而築、有六十六穴、穴藏經四五卷、別無他物。外屋石牀一、左鋪羊毛氈、尚完好、右鋪線氈、已成灰。牀下僧履一双、色深黃、白口、如新造者。中一几甚大、金仏一尊、重約三百兩。金香炉大小各一、大者重百余兩、小者二三十兩。大石椅一、鋪極厚棕墊。渠令某携仏牀而去、又取經二百余卷。後為大吏所知、遣員至敦煌、再啓石壁、尽取經卷而去。聞渠令取仏炉、悉鎔為金条、以致唐代造像美術、未得流行於世、惜哉」。

宣統庚戌（二へ一九一〇）年、伯再游京師、其行篋尚

有書十余種、仏像十余紙、唐拓碑三種。羅叔蘊參議振玉聞之、往謁伯、尽窺篋中所有、並得其寄法之各種書目、撰為『敦煌石室記』印行。

先是、英印度總督派員搜石室書經文、載之婦倫敦、伯所得、僅三分之一而已。迨学部貽書甘督、令購送來京、其菁華固已無多。時護甘督何彥昇有子在都、故先落其手、佳者復悉為所留。其婦翁李盛鐸且分得唐人所寫『礼』注・『書經』等、尤可寶貴。凡与何子相契者、無不得之、有分至數百卷之多者、故廠肆出售不絕也。

### 姚秦写本僧肇維摩詰經解殘卷校記（羅振玉）

宣統紀元（一九〇九年）、予備員学部、伯希和博士既告予、敦煌石室尚有殘卷八千軸。予乃懲患部中購取。明年（一九一〇）、由署甘督毛公遣員某、運送京師、既抵春明。江西李君与某同鄉、乃先截留於其寓齋、以三日夕之力、邀其友劉君、婿何君及揚州方君、拔其尤者一二百卷、而以其余婦部。李君者富藏書、故選捫尤精、半以婦其婿、秘不示人。方君則選唐經生書跡之佳者、時時截取數十行鬻諸市。故予篋中所儲方所售外無有也。歲壬戌（一九二二年）、予自海東移寓津沽、則何君已物故、乃尽得其所藏數十卷。而以維摩詰經解二卷為之冠（後略）丁丑（一九三七年）中秋松翁羅振玉書

### 敦煌藏卷劫余小記（羅繼祖）

甘肅敦煌鳴砂山石室所藏古卷軸、既為帝國主義者先後盜竊捆載以去。至宣統紀元（一九〇九）、学部当局始電諮甘督、購致京師圖書館。解送委員贛人某到京、先不至部而主其同鄉某家、某乃竭日夜之力割裂竄取、事頗聞于外。王觀堂國維跋『敦煌本太公家教』、謂「此石室遺書未入京師圖書館時流出人間者」、即指竊而復出之一種。先祖羅雪堂振玉『姚秦写本僧肇維摩詰經殘卷序』亦記其事云、「江西李君与某同鄉、乃先截留于其寓齋、以三日夕之力邀其友劉君、其婿何君及揚州方君、拔其尤者二百卷、而以其余婦部。李君者富藏書、故選捫尤精、半以貽其婿、秘不示人。方君則選唐經生書跡之精者、時時截取數十行鬻諸之。」不欲顯斥其名。又云、「予篋所儲方所售者外無有也。歲戊午（一九一八年）自海東移寓津沽、則何君已物故、乃尽得其所藏數十卷、而以『維摩詰經解』二卷為冠。」（按葉恭綽『張谷籙所藏敦煌石室圖籍錄序』所言与先祖大同、見『矩園余墨序跋補遺』。予一九六五年于都肆得吳昌綬『松鄰書札』、中有与張祖廉一札、云、「頃邕威（何震彝）同年來、謂訪公未值、有言托為代致、甘省解經之傳委員、淹留已久、其事既無左証、又系風流罪過、今窮不得婦、日乞邕威為道地。弟聞前事已了、堂憲本不深求、可否仰仗鼎言、懇懇主掌諸君、給批放行、其批即由公交邕威亦可、渠既相囑、特為奉

致、望復之。』有此然後一事之首尾乃具、且知解送者傳其姓。以公然盜竊之案、僅以「査無実拠」四字了之、又以爲「風流罪過」、可謂巧于開脫。「堂憲本不深求」云云、亦可窺箇中消息、堂憲之一大学堂総監督贛人劉某固案中也。一窃再窃不已、菁華垂尽、宜後來陳援庵編目以「劫余」名之、人第知其爲帝國主義之劫余、而不知劫中尚有劫也。

付記 小稿を成すに当たり、貴重な資料を御貸与下さった、北京

大学栄新江教授また、愛知文教大学 Chao Chee-ling, Serena 准教授に心から御礼申し上げたい。また、張虹関連の事柄を種々御教示下さった、深圳金石資産管理有限公司の呉強華、蘇合中両氏、また、私の北京遊学中、通訳を努めてくれた北京大学碩士研究生長内佑希君にも、心から御礼申し上げます。特に君の助力がなければ、小稿が成ることはなかっただろう。小稿は、平成24年度科学研究費補助金基盤研究(B)並びに、同佛教大学特別研究費による成果の一部である。

## 注

① 拙稿「杏雨書屋本太公家教について―太公家教攷・補(二)

―」(『杏雨』14、平成23年6月)

② 饒宗頤氏「京都藤井氏有鄰館藏敦煌殘卷紀略」(『金匱論古綜合彙』1(一九五七年か)。後、同氏『選堂集林 史林』(中華書局、一九八二年)に再録)

③ 「張谷雛所藏敦煌石室図籍録序」の引用は、『矩園余墨』序跋補遺(国家図書館蔵古籍題跋叢刊30所収、北京図書館出版社、

二〇〇二年)に拠る(なお、『矩園余墨』として、新世紀万有文庫(遼寧教育出版社、一九九七年)に翻刻が収められる)。

④ 羅振玉氏はかつて、三本の太公家教を所蔵していた。一本は、完整なもので、『鳴沙石室佚書』に収められる。残る二本は、殘闕本である(『貞松堂藏西陲秘籍叢殘』所収。これら三本の行方は、現在知られておらず、唐蘭氏のそれが、もし新出の太公家教でないとしたら、或いは、羅氏旧蔵の殘闕本などであった可能性も考えられるだろう。羅氏旧蔵太公家教三本の出所もまた、不明とせざるを得ないが、羅氏は、一方において、

歲壬戌(一九二二年)、予自海東移寓津沽、則何君已物故、乃尽得其所藏數十卷(姚秦写本僧肇維摩詰經解殘卷校記)

と述べていて、何彦昇(魯威)旧蔵の敦煌文書を入手したことが知られるので、羅氏旧蔵のその殘闕二本は、何氏などから出たものである可能性がある。そこで、改めて羅氏旧蔵殘闕二本の筆跡を眺めていて、興味深いことに気付いた。199頁上下の参考図一に掲げるのは、その殘闕二本である(『貞松堂藏西陲秘籍叢殘』に拠る)。参考図一の上が殘闕本の甲巻で、太公家教第366―415句を収め、下がその乙巻で、同第343―386句を収めている(幼学の会『太公家教注解』(汲古書院、平成21年)参照)。さらに今、参考図二の上を甲巻a(366―407)、b(410―415)、下を乙巻a(343―388)、b(370―386)と呼ぼう。ところが、甲巻a、b、乙巻a、bの筆跡その他をよく見ると、その甲、乙二本と見えたものが、実は甲巻aは、乙巻aに後続する殘卷であることが判明する。参考図二は、乙巻aと甲巻aとを、繋ぎ合わせたものである(繋ぎ目が存するのは6、7行目の間)。故に、その二本は、乙巻aと甲巻a、bとで一本とし、乙巻b

禍不入慎家之門人  
良田說言改

防外敵先須內防  
自楊傷人之語還是自傷  
得針量第茨之家或出谷王  
助祭得食助得傷仁慈者  
水為土所傷濟之仕為酒所  
楊知人有過密掩深藏是故  
鷹鷂雖迅不能快於  
下唐虞雖聖不能諱  
及其身蛟龍雖  
不能致清潔之人

之事之十年已六即  
居五人長者必跪三人同  
言而從之其不善者而  
既不擇食寒不擇衣小人為  
相和欲求其強先取其長  
欲求其弱先取其短欲求  
之思還須自楊傷人  
永不可針量第茨之家  
蘭香助依得食助開  
之永為土所傷濟



人事之十年已上即元  
居五人長者必跪三人同  
首而從之其不善者亦  
既不擇食寒不擇衣小人爲  
相知欲求其短先取其長  
欲求其短先取其強欲  
防外敵先須內防欲量他  
道自楊傷人之語還是自傷  
得計量其損之家或出王  
助祭得食助祭得傷仁慈者  
水爲止所傷濟之仕爲汨所  
楊知人有過密掩深藏是故  
鷹鷂雖迅不能快於鷹  
下唐虞雖聖不能諱其  
及其身蛟龍雖匿  
不能歟清素之人

## 参考図 二

をさらに一本としなければならぬのである。羅氏は、乙巻aが第38句で終わり、乙巻bが第37句から始まって、両者が近接することから、それを乙巻(a、b)としたものと思われるが、それは誤りである。かつて太公家教諸本の系統を考えたことがあつて(拙稿「太公家教攷」、「日本敦煌学論叢」1所収、平成18年)、その折は羅氏の分け方に従い、甲巻をE系統、乙巻をB(1)系統としたことがある。しかし、甲巻a、bを乙巻aに後続させて一本とするならば、今それをB(1)系統とし、また、乙巻bもB(1)系統とすべきかと思われる。ここで訂正しておきたい。

### ⑤ 注①前掲拙稿

⑥ 榮新江氏「李盛鐸藏卷的真与偽」(『敦煌学輯刊』97・2。同氏「鳴沙集——敦煌学術史和方法論的探討」(『敦煌叢刊』二集12、新文豐出版股份有限公司、民国88(一九九〇)年)に再録、同氏「弁偽与存真、敦煌学論集」(上海古籍出版社、二〇一〇年)に再々録)

⑦ 参考として、『矩園余墨』序跋補遺所収の序文を、201頁、202頁上の参考図三に掲げる(参考図三は、注③前掲の国家図書館藏古籍題跋叢刊30に拠る)。

⑧ 徐珂撰『清稗類鈔』の引用は、『清稗類鈔』第九冊(中華書局、一九八六年)に拠る。

⑨ 張広建については、富田淳氏「張広建について」(『科学研究費補助金成果研究報告書』敦煌写本の書誌に関する調査研究——三井文庫所蔵本を中心として——、平成15年3月。三井文庫別館藏品図録『敦煌写経——北三井家——』三井文庫、平成16年)に再録)に詳しい。

⑩ 鍋島稻子氏「不折旧藏写経類コレクションについて」(『科学

# 張谷雛所藏敦煌石室圖籍錄序

張君谷雛安雅士耽研藝術古物前者曾與李鳳坡合編宜興砂

矩園餘墨序跋補遺

八二六

壺圖錄爲一佳著余會序之繼搜藏書畫又於燕京得敦煌出土物如茲錄所載余已爲之題跋矣嗣谷雛廣徵同人考訂識於臺爲一編復問序於余余曰敦煌圖籍數萬于所藏滄海一滴耳然月印千江何處非月且四十年來敦煌圖籍赫奕於世而深悉其詳者尙鮮余以積年留意所知較豐今老且死乘此表告世人責亦應爾故不辭贅述焉蓋敦煌石室藏物之散出可分爲數類一爲史坦因所取二爲伯希和所取二者世已周知三則當史坦因未至之前已有少許散出蓋亦王道士輩之所爲緣村人喧傳可以治病却邪故恆出賣向道士索去供養地方官吏亦恆有用爲餽贈者前後當有數百卷厥後張廣建許承堯謝書樞等所得殆皆此類蓋出土在先而集藏在後也張許謝皆於民國初年官甘肅四則清宣統二年由學部調取後付存今北平圖書館之九千餘卷其到京以後之

中飽誠如谷雛所聞其時官中冊報有卷數而無名稱及行款字數故一卷得分爲二三以符原數其精英皆歸李氏次及劉幼雲廷琛字之又次及李之戚友其得分惠二三卷至十數卷者亦不勘五則史坦因伯希和以外德意志日本美利堅各圖書館亦曾得大批其時間不詳殆皆在運交學部之前或隨後別於當地搜購者綜上所述由敦煌整批流出之圖籍不外此數厥後張廣建所得約二百卷大半歸西充白堅以後聞又散出許承堯所得分批售出余曾與友人共購得七八十卷餘皆零售莫可蹤迹翻書櫃所得不少或尙在其家其散在國外者聞英美德法今皆無恙獨日本所得藏之旅順圖書館者恐已燬矣矣至李劉何所得何早卒除其生前贈友者外餘聞亦歸李氏世食知李劉二氏多佛經以外之典籍偶露鋒爪固難窺其秘也近年李劉皆去世所藏

矩園餘墨序跋補遺

八二七

始分別散出余曾介南京圖書館購入二百餘卷聞劉氏有佳品約百卷歸於張君厚張固劉戚也李所藏由家屬折分各售不復能聚谷雛所得殆即其類抑李氏藏品亦有由市買轉售而加以裝飾附會者此亦不止李氏藏品爲然北方敦煌各品均有仿製以畫壁最爲流行造象次之經卷最少以書法不易仿也間有以真跡剩紙仿寫者其偽易售然細辨終能別也谷雛所藏各品固無疑義然李氏藏印頗係市賈所加蓋本齋無自加藏印以自發其覆之理且刻工均劣較之其藏書印章判若霄壤此與書畫之強補印章同爲蛇足明眼所宜辨也抑余所最感慨者則敦煌藏品之發見及五十年經國人之努力起進僅保全其部分其散出國外者已不能復返而散在世間各地者雖均遭重視但實際能加以整理與研究者亦復不多伯希和所得始終僅編成一部簡



明目錄英德各國者亦然其根據各品物加以較深切之研究並有著作者則仍推吾國而日本次之吾國例如羅振玉王國維王仁俊陳垣劉復王重民鄭振鐸張愛陳寅恪馬衡郭沫若李劫鈞曹元忠蔣鳳藻胡鳴盛許國霖向達諸君皆具有成就其片段之考證關發則人數更多計非他國人所企及也然綜合條貫成爲一有系統之專門研究者仍不多見則環境限之吾人未可謂已盡其責也吾嘗欲調查存在世間之敦煌石室物品而編一總目曾於二十年前組一敦煌經典輯存會以此爲第一步之工作然迄未能成其已得之資料因亂亦都散佚恆引爲愧咎今年力衰邁祇可以待後賢矣夫往哲集存之物吾人僅負保管整理之責尙不能盡其職進言改良進步以是知吾國百端之不振蓋有由也抑余更有感者西北地方高燥往時文物之存於山巖地穴未遭毀壞者不知凡幾敦煌其一而已近年焉者鄭善吐魯番哈密一帶經外人發掘取去之文物騰躍世界國人或竟不之知或視若無賴吾人好自詡地大物博然貨之棄於地文物之藏於地人民之居於地者概聽其否塞晦盲與損失而但以主人翁自居則又何義也故吾人之考古宜有其遠大之思想背境否則玩物而又喪志矣此又博雅好古之君子所宜知者因觀斯編推論及之一九四七年冬

参考図 三

- 研究費補助金成果研究報告書『台東区立書道博物館所藏中村不折旧藏禹域墨書集成』下（特定領域研究へ東アジア出版文化の研究）総括班、平成17年
- ⑪ 白堅については、高田時雄氏「李滂と白堅」（『敦煌写本研究年報』1、平成19年3月）に詳しい。
- ⑫ 李盛鐸の偽印をめぐる諸問題については、注①前掲拙稿及び、榮氏注⑥前掲論文参照。
- ⑬ これら三点の基礎史料については、榮氏注⑥前掲論文を是非参照されたい。